

# アジアトラベリングフェロー2017 報告記

(香港、ベトナム)

さんむ医療センター整形外科部長・医務部長 石川哲大



## アジアトラベリングフェロー採択

この度、日本脊椎脊髄病学会より第12回 JSSR Asia Traveling Fellowship に採択され、九州大学病院別府病院整形外科の樽角清志先生と共に2017年8月末に香港（The Duchess of Kent Children's Hospital、Queen Mary Hospital, Hong Kong University Hospital）、11月上旬にベトナム（Trung Vuong Hospital、Khanh Hoa General Hospital）を訪問しました。

このフェローシップは、アジア諸国との学術交流を目的とし、日本脊椎脊髄病学会国際委員会により選考されます。私は3回目の応募でやっと採択となり、貴重な機会を得ることができました。

## ①香港大学病院訪問

8月下旬から9月上旬にかけて香港大学病院を訪問しました。事前のメールでのやり取りの中で香港大学整形外科秘書さんにお勧めいただいた Pacific Island Hotel に宿泊しました。ホテルのある Sai Ying Pun 駅から香港島の西側へ電車で3駅、そこからさらに市民バスで20分ほど行くと（初日はこのバス待ち行列の長さに驚きました！）、約130床の Duchess of Kent Children's Hospital (DKCH、写真1)があり、さらにそこから急勾配の坂を車で5分ほど登ると約1400床の大病院 Queen Mary Hospital (QMH)があります。



全国の応募者から今回は10人が採択されました。



DKCHの前で、樽角先生と。





一方では、中国本土の経済的な問題のために治療を受けられない側弯症の子供を援助する NGO との連携もあり、自分たちの基金でサポートし保険診療外で治療を行っているとのことでした。実際に NGO 活動家の方が連れてきた小さな子供の診察に立ちあう機会がありましたが、親から離れて一人で中国の奥地から香港まで手術を受けに来なければならない状況についても考えさせられました。

Wong Yat Wa 先生（右写真中央）が若手医師への手術指導を担っており、滞在中は Wong 先生が我々の手術参加などのスケジュール管理から日々の送迎まで、とても親身に面倒を見て下さいました。香港では広東語と英語が公用語ということで、カンファレンスや回診においてはドクター間だけでなくコミディカルとも主に英語を使い、患者さんには広東語で接していらっしゃいました。病院自体は歴史があり決して新しい建物ではないものの設備は近代化されており、手術室の雰囲気は日本に似ていました。

病棟回診では時に Cheung 教授、Luk 教授、Wong 先生からスタッフや若手医師、我々 fellow にも鋭い質問があり常に緊張感に溢れていました。一人一人の患者さんの治療方針についてじっくり議論する姿は非常に印象的でした。外来でも回診でも丁寧に理学所見を取り、良く患者さんの話を聞き、熱心に説明されている姿に感銘を受けました。また、全ての議論において、論文に基づく知識から治療方針決定の根拠を明確にするコンセンサスが感じられ、今後の自分の診療に見習うべきものがありました。

向かって左より 4 番目が Wong 先生、右へ続いて樽角先生、主任教授の Kenneth MC Cheung 先生、石川。Kenneth Cheung 教授の外来を見学では、香港大学と企業の提携で開発されたスマートフォンと合体する側弯症計測デバイスを見せていただきました。学会などで世界中のドクターに無料で配る代わりに大量のデータが自動的に送られてくるそうです。経済特区であるため新規デバイスの開発や申請が早いようであり、この点では日本の状況ではかなわないと感じました。



前教授の Luk 先生。非常に有名な方です！

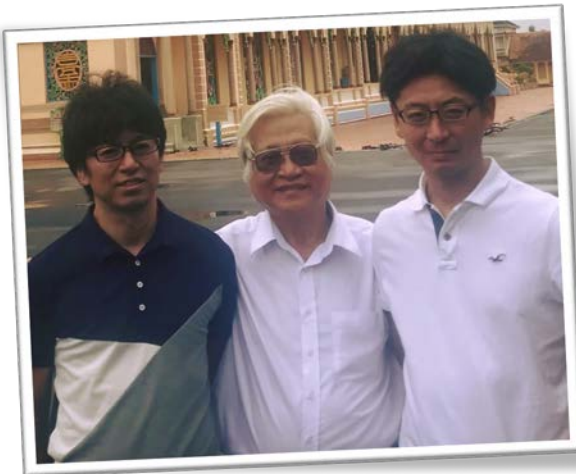




ちょうど同じ時期にドイツから香港大学に半年間の研修に来ていた Peter (左写真) はその後フィアンセと日本に遊びに来た際に連絡をくれ、築地や森ビルなどを案内するような交流もできました。香港滞在を通じて、高名な先生方や同世代の医師にいろいろな話を伺い、交流できたことは非常に有意義な経験となりました。

## ②ベトナム訪問(ホーチミン、ニャチャン)

11月上旬にベトナムを訪問し、前半は Vo Van Thanh 教授(右写真中央)の所属する Ho Chi Minh (ホーチミン)の Trung Vuong Hospital、後半は Hoang Manh Tran 先生が Spine Chief を務める Nha Trang (ニャチャン)の Khanh Hoa General Hospital を訪問しました。



### Trung Vuong Hospital (Ho Chi Minh City)

Trung Vuong Hospital では手術見学だけでなく、外来や回診の合間に Vo Van Thanh 先生から多くの話を伺いました。治療費が払えない患者さんが描いた絵を御自分で購入されて治療費に充てたり、金銭的な補助を募り患者さん同士で集まる機会を作って横のつながりを作ったり、患者さん思いの優しさに溢れた先生でした。また、ベトナムの医師を取り巻く教育環境をなんとか良くしたいと強く思われており、教育システムの改変に尽力されていました。早くホームタウンに戻りたいが、やるべきことが終わるまでは戻れないと後輩の今後の進むべき道を作られるために尽力する姿に感銘を受けました。

Vo van Thanh 先生より、研修直前の週末から来るようお誘いいただき私は土曜日早朝に到着しました。なんと朝暗いうちから若手の先生方が空港に迎えてきてくれており、朝食のあとは一日中観光に連れて行ってくれました。教授にお勧めいただいた Majestic Hotel に宿泊しましたが、観光スポットになるくらい有名な歴史ある素晴らしいホテルでした。日曜日は Vo Van Thanh 先生のご実家のある Tay Ninh 市まで、片道 90km、Tam ho Nhut 先生の運転で 2 時間以上をかけてご案内していただきました。Vo Van Thanh 先生が信仰される宗教の総本山の見学や、ご実家だけでなくご親戚のお家までお邪魔し、研修が始まる前からの歓迎に樽角先生とともに非常に感激しました。







医療現場においては入院患者さんの世話を家族が中心となり行っていたり、手術機材も不具合があったりと日本と比較して決して恵まれた環境ではありませんが、限られた医療資源のもと全力で患者さんの治療に向き合う姿勢には見習うべきものが多々ありました。また、30分程度ずつ講義を行う機会をいただきましたが、手術開始時間を変更してまで病院中のドクターが集まって下さり、熱心に質問をしていただきました（左写真）。

## Kahn Hoa General Hospital (Nha Trang City)

Nha Trangは我々の訪問直前に50年に一度という超大型サイクロンが襲来しており街中の街路樹や電柱が折れて電線が切れていたり、倒れた木で家屋が崩壊していたりと街中は大変なことになっていました。Khanh Hoa General Hospitalは窓枠が外れたり、木々が倒れたりしてはいましたが診療は通常通り行われていました。こちらの病院でSpineのChiefを勤めているManh先生は我々と年齢が近いこともあり症例ごとに細かくdiscussionの機会を持ってくれたり、手術中もその都度「これで良いと思うか？」と確認の質問をしてくれたり、手術の合間には今までで辛かった合併症などをお互いに話し合ったりして親交を深めることができました（右写真）。



両病院共に空港までの送迎や毎日の病院-ホテル間の送迎を確実にしていただいたり、滞在中の食事は毎食可能な限りDr、Nsなどのスタッフが集まってくれたり、ベトナムの方の非常に強いHospitalityを感じました（左写真）。ほとんどのドクターは日本への留学経験があり、日本で受けた親切を少しでもお返ししたいと話されていたことも印象的でした。それぞれが忙しい時間を都合して僕たちの滞在時間が充実するように連絡を取り合ってくれており、非常に良いチームワークが出来上がっていることにも感銘を受けました。



このような貴重な機会を与えていただきました日本脊椎脊髄病学会の関係者の方々、訪問にあたりまして情報をご教示いただきました同門先生方、また留守中にご迷惑をおかけしたさんむ医療センターの皆様はこの場をお借りして深謝致します。